

北九州市制 50 周年と 北九州市立自然史・歴史博物館

北九州市立自然史・歴史博物館 自然史課長 馬場 稔

講
演

1. 北九州市制 50 周年と自然史・歴史博物館

2007 年 8 月から 2008 年 1 月まで、北九州空港のロビーに、あるカバの全身骨格が置いてありました。このカバは、1960 年に上野動物園で生まれ、ちょうど北九州市が生まれた 1963 年に、当時あった西鉄到津遊園という動物園に来園しました。残念ながら 50 周年までは生きられなかったのですが、カバとしては長寿を保って、2002 年、もう少しで市制 40 周年というところまで生きていました。

到津遊園は、「北九州市民は生涯で 3 回は行く」と言われていた公園です。子どものときに遠足で連れて行かれ、親になったら子どもを連れて行き、孫ができたなら孫を連れて行く。そういう非常になじみのある動物園に、ちょうど市が誕生した年に来て、市の発展をずっと見守ってくれたという意味で、市制何十周年というときにはこの標本を紹介することにしています。

ここで、北九州市における博物館や美術館の設立経緯をたどってみたいと思います。1984 年に発行された市制 20 周年記念誌の補稿資料には、1972 年から 1979 年にかけて出された五つの市民文化についての答申が掲載されています。1 番目は、1972 年に建設準備委員会の名前で出された美術館建設に関する答申です。候補地として、今の美術館がある高見丘陵地帯が具体的に挙げられています。

2 番目は中央図書館建設についての答申です。これも準備委員会の名前で、小倉図書館の用地という具体的な場所が示されています。

3 番目に、歴史博物館建設に関する答申が開設準備委員会の名前で出されており、中央図書館と一緒に造ることがうたわれています。

4 番目の自然史博物館の建設についての答申は、開設準備委員会ではなく、建設調査委員会の名前で出ており、少し具体性に欠けるところがあります。場所も、「自然度の高い地域、公共輸送機関に近いところ」という漠然とした表現にとどまっています。

ちなみに、この答申の前文には、「北九州市は明治以降の近代的な工業都市として飛躍的な発展を遂げてきたが、その半面、都市化が進むにつれて、都心部と周辺部の自然は昔日の様相を失っている」とあります。最近はきれいな空も水も戻ってきていますが、一時は公害の町として有名でした。そういう背景があって、「市民は本来、自然を愛する心を持っている。市民一人一人が自然に対する正しい理解と認識を持って積極的に取り組んでいくなれば、この北九州市は素晴らしい環境に恵まれた都市になるだろう」と記されています。今はかなりそれに近づいてきているように思いますが、このような答申が出されています。

最後は、考古館埋蔵文化財センター（仮称）の計画・検討についてです。検討委員会という名前になっているので、調査委員会よりも一つ前の段階になるかと思いますが、答申ではなく報告という形で出されています。場所としては「歴史博物館と近いところ」という表現がされています。

1972～1979年ということは、市が誕生して10年近くたち、社会資本などが整ってきたころです。市として余裕ができ、やっと文化的なところに力が入ってきたのではないかと思います。ただ、美術館、図書館、歴史博物館は具体的な場所まで決まり、造るのが前提というところが見えますが、自然史博物館は計画だけで、まだ実際に造るところまでは至っていないように感じます。

その後、市立美術館が1974年11月に開館しています。有名な建築家のデザインで、少し変わった形をしています。歴史博物館は中央図書館と併設され、1975年8月に開館しています。こちらも美術館と同じ建築家のデザインで、非常にユニークな形をしています。この二つは、市としてもかなり力を入れていたのだらうと思います。

わが自然史博物館はどうかというと、1981年5月に、1階部分が八幡駅の駅舎、2階部分が展示室、3階部分が事務室という駅中博物館として開館しました。残念ながら、美術館と歴史博物館はちゃんとした建物が造られたけれども、自然史博物館は建物を造るところまでいっていなかった。場所も決まっていなかったけれども、いろいろな資料が集まっているので、公開しなければいけない。それで、八幡駅の中に仮の施設として公開されたという経緯があります。

実は、美術館と歴史博物館は答申が出て2年後にできています。ところが、自然史博物館は、答申が出てから4年後に開館はしたのですが、残念ながら仮の施設でした。また、先ほどの資料でいくと、美術館の答申はわずか3ページ、中央図書館も5ページ、歴史博物館も4ページですが、自然史博物館は12ページを費やしています。美術館、図書館、歴史博物館は、分かりやすく、受け入れられやすいのですが、自然史博物館は理解してもらいにくいからだと思います。

自然史博物館は生き物や化石を扱うので、一般の方になじみがあり、興味も深いのですが、博物館として成り立たせるためには、いろいろと説明を書き込まなければならなかったでしょう。実際に答申を読んでもみると、美術館は目的や施設についてごく簡単に書いてありますが、自然史博物館は、自然史博物館とは何ぞやというところから説き起こされています。その辺の裏の事情も見えてきたような気がします。

2. 自然史博物館の歴史

そもそも自然史博物館開設の話が出てきたのは、1974年に小学生が見つけた化石が発端です。市内のあるところで遊んでいて化石を見つけたのですが、よくよく調べてみると新しい種

類だということで、ディプロミス・タス・コクラエンシス、ディプロミス・タス・プリモティナスという学名が付けられました。そういう貴重な標本は地元で保管したい、そのためにはきちんとした自然史博物館が必要だということになったのです。

ディプロミス・タスは 10cm 前後の小さい魚ですが、この魚の化石は、言ってみれば当博物館の生みの親なので、われわれにとってはとても大事な標本です。現在、展示室の中央付近に特別コーナーが設けてあり、ホロタイプ（模式標本）が展示してあります。

八幡駅時代の展示室には、アロサウルスやプロバクトロサウルスの標本が展示されていました。私がこの博物館に入ったのは 1992 年で、仮の施設として 10 年間活動されていたころです。さらに 10 年間、仮の施設で過ごすことになるのですが、当時の入館者数は約 4 万 1000 人（常設展 1 万 7000 人、特別展 2 万 3000 人程度）でした。年間 3 万人から、多いときで 8 万人ぐらいの方に見ていただいております、仮の施設としては結構頑張っていたのではないかと思います。当時は、職員 15 名（うち学芸員 7 名）でした。今の半分弱の人員体制で、それだけの方に見に来ていただいていたということです。

当然、駅の建物ですから、博物館として必要な施設は全くありません。そこで、博物館から徒歩 5 分のところにあった市所有の建物をお借りして作業室や研究室を置き、特別展などを行いました。尾倉分室と言っていましたが、特別展のときだけは一般のお客さまに入ってください、収蔵品も含めて見ていただきました。

それでも、収蔵品が増えてくると場所が足りなくなったので、今度は廃校になった小学校を天神収蔵庫と称して、収蔵庫や研究室として使いました。自分たちで窓に目張りをし、コンテナやお茶箱にいろいろな標本を入れていました。本来の収蔵庫ではないので、虫やカビがとても怖かったのですが、エアコンだけは入れてもらって、何とか 10 年ほど、この中で大事な資料を保管していました。

幸い、小学校なので給食室があり、水を遠慮なく流せたので、博物館学の実習生を受け入れてタヌキの頭の骨を洗ってもらうなど、地道に作業をしていました。他の博物館もそうだと思いますが、裏方の仕事は決してきれいではありません。今、展示されているニタリクジラの標本も、捕鯨が禁止になる直前に生のものを頂いて、いったん海岸に埋め、それを掘り出してきれいにしたものです。私は途中から博物館に入ったので経験しないで済みましたが、写真を見るだけでも臭いが漏れてきそうな状況です。そういう作業を経て、初めて市民の方にきれいな標本を見ていただけるのです。

もう一つ、ぜひご紹介したいのが友の会です。「北九州自然史友の会」は 1979 年 1 月に発足しています。仮の施設とはいえ、自然史博物館ができたのが 1981 年ですから、準備室の時代から既に友の会ができ、「わたしたちの自然史」を発行しながら手伝ってくださっていたのです。学芸員の最初の研究報告が出たのも、博物館ができる前です。準備室の時代から市民の方のご協力を得て、学芸員が博物館本来の活動である研究報告を意識していたことは、とても大きな意味があると思います。

3. 北九州市立自然史・歴史博物館

3-1. 概要

2002年11月に、自然史博物館と、既に開館していた歴史博物館、考古博物館も一緒にこの建物に移ってきて、「北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）」が誕生しました。もともとは2001年に、官営八幡製鉄所100年を記念して催された「北九州博覧祭2001」のメイン会場に使われた建物でしたが、博覧祭の後は博物館にすることが最初から決まっていたので、将来的に展示場、研究室、処理室等を造ることを念頭に置いて、建物を設計していただいています。

工事が始まったのが1999年6月、竣工が2001年3月で、2001年7月から11月まで博覧祭の会場として使われていました。それから展示工事を始めて、2002年11月3日にめでたく開館しました。敷地面積は約3万1000㎡、うち半分の1万5500㎡は駐車場です。建築面積は8770㎡、延べ床面積は約1万7000㎡で、鉄筋コンクリートの3階建てになっています。展示面積が約3分の1の6100㎡、そのうち自然史関係が約4000㎡、歴史関係が約2000㎡ですので、3分の2を自然史系で占めていることになります。

もちろん、展示ばかりでなく、バックヤードもいろいろと充実しています。これには、仮の施設で20年間過ごしてきたことがいい方に働いていると思います。学芸員はいろいろと経験を積み、博物館にはどのような施設や部屋が必要かが分かっていたし、事務系の方も、博物館が裏でどのようなことをしているかを理解していました。ですから、かなりぜいたくと言えるようなお願いもしたのですが、大部分が受け入れてもらえました。

一般の方が見学される展示部分の裏側には、電子顕微鏡室、化石を修復する部屋など、目的別の小さな部屋がたくさん並んでいます。収蔵庫や、研究施設、処理のための設備もきちんと整備していただけたことを、とてもありがたく思っています。

収蔵庫は、内側は板張りで、中2階になっています。なるべく収蔵面積を大きくするためにそのように造ってもらったのですが、既にいっぱい、私が担当する哺乳類の収蔵庫は、棚の間の通路までたくさんの標本で埋もれています。

この博物館のガイドブックやリーフレットには、約6000点の標本を展示していると書かれていますが、実際に数えてみたら、自然史系だけで8000点を超えていました。歴史系を入れると1万点を超えているのではないかと思います。それでも、収蔵標本は約70万点あるので、展示しているのは約1%です。収蔵標本のうち、登録して番号を付けているのは約10万点です。展示に向く標本と向かない標本があるので、全部が展示できるわけではありませんが、展示にも使える標本は、特別展などでできるだけ紹介するように努めています。

地理的に言うと、この博物館は福岡県の北の端にあります。福岡県の博物館協会加盟館は全部で67あり、その中の一つです。北九州地域には、近隣の市町村を含めて八つの資料館なり博物館がありますが、加盟されていないところもあるので、民間の展示室を加えると20以上はあると思います。

博物館がある場所は、今はかなりまちなかになっていますが、1969 年の地図で見ると工場地帯のど真ん中です。要するに、工場がなくなって空いたところに、この博物館が建設されたということです。実は、山田緑地も自然史博物館の建設候補地として挙げられたことがあります。戦前は日本軍の弾薬庫だったところで、人が入れなかったのも、今は立派な林になっています。そういう環境の良いところではあったのですが、少しまちはずれになり、公共交通機関の便があまり良くないため、現在の地に新しい博物館ができました。現在、山田緑地は、21 世紀ではなく 1000 年後を見据えて、「30 世紀の森づくり」をテーマに運営されています。

博物館のロゴマークは、卵の形を青と緑と黄色に塗り分けたもので、青は水、緑は緑（自然）、黄色は大地、そして卵の形で命を表しています。

この博物館の理念は、「自然と人間の関わりを考える共生博物館」です。この理念を実現する上で重要なことは、①博物館の展示において示していく、②教育・普及事業において啓発を行う、③資料収集、保存および研究を進めていくという 3 点です。

資料収集・保存・研究があって展示や教育・普及事業が成り立つことは誰でも分かっているだけだと思います。しかし、展示はお客さまが見ます。教育・普及活動は時間が決まっています。ですから、どうしてもやらなければいけないということで、ついつい資料収集・保存・研究が後回しになります。その影響はすぐには見えませんが、長い目で見れば、情報が入りにくくなり、次の展示更新がしにくくなります。忘れないためにも、きちんと書いておくことが大事だろうと思います。

そのためにどうするか。方向性として、三つのことをうたっています。一つ目は「知的アクセス権を保障する博物館—知的好奇心への対応」です。具体的には、ミュージアム・ネット化構想を進める、常に開館している博物館「24 時間ミュージアム」を推進する、知的な疑問や話に責任を持って答えるということを意識しています。最近はインターネット等が発達しているので、夜中でも質問が入れば、次の日には何とか答えたい。そういう気持ちは常に忘れないようにしたいと思っています。

二つ目は「セカンドスクールとしての博物館—将来への知的投資」です。学校等に対して誘致事業を推進する、学校教育の支援事業を強化・拡大する、家庭教育の支援事業を充実することも大事だということです。

三つ目の方向性は、「研究の成果を教育・普及に生かす博物館—社会への知的還元」です。知識と経験を生かして質の高い展示と教育・普及事業を行う、知の集積施設として外部の委員・講師や他の組織の指導・助言を行う、地域の特性を生かした研究を行い、広く情報発信するということを意識しています。

1992 年は 15 名の人員で運営していたと言いましたが、現在の体制は、職員が市の職員 31 人と嘱託の方を含めて 35 人、そのうち歴史課の学芸員が 7 名、自然史課は生物系 7 名と地学系 4 名で計 11 名です。それ以外に、施設の維持管理、掃除、展示交流員、ショップの方等が 35 人ぐらいおられるので、合計約 70 人がこの博物館で働いてお給料を頂いてい

るということです。その中には、ミュージアムティーチャーが4名いらっしゃいます。幼児教育から小学校、中学校の現役の先生方に2～3年、うちの博物館に入っていただき、主に学校現場との対応を受け持っています。

歴史7名、自然史11名の学芸員がいるというのは、市立の博物館としてはかなり恵まれた方だと思います。ただ、担当分野別に見ると、当然ながら1人しかいません。自然史の地学系だと、地質・地層、岩石・鉱物、古脊椎動物（恐竜関係）、古無脊椎動物（フズリナや微化石）、生物系だと、植物、甲殻類・貝類、昆虫、魚類、両生類・爬虫類、鳥類、哺乳類に1人ずつです。歴史は、考古が2人、歴史が3人、民俗、古美術工芸が1人ずつです。

ですから、恵まれているようで、それぞれの分野に限って見れば、一から十まで自分でやらなければいけないということです。ただ、日本の博物館はどこでも事情は同じかと思います。

3-2. 展示構成

自然史ゾーンには、まずアースモールがあります。これは造語で、ショッピングモールと引っ掛けて、「地球の回廊」のような意味合いで使っています。アースモールは、地学現象、古生代、中生代、新生代という構成になっています。

入ってすぐの地学現象のコーナーには、隕石などが展示されています。古生代から中生代のコーナーには、今はティラノサウルスのスーがでんと構えていますが、リニューアル前はセイスモサウルスが見えていました。階段を上がると古生代から中生代に時代が変わります。また階段を少し上ると新生代に入ります。一番奥に行くと、キリンとゾウの剥製があって、上にニタリクジラ、マッコウクジラ、マンボウもあります。担当者としては、こういうむき出しのところに剥製を置きたくないのですが、この剥製を置くことで、ここから先は現生の生き物だということが分かるように配置されています。

一番奥が生命の多様性館という、現生の生き物を展示したコーナーです。ほとんどの標本が実物です。特にウバザメは、若松の沖で網に掛かったものを頂いて、標本化したものです。カビや虫に弱い標本が置いてあるので、この展示室だけは、年に1回、燻蒸してもらっています。

一番の目玉がエンバイラマ館です。これも environment（環境）と diorama という言葉を組み合わせた造語です。エンバイラマ館は、中心になっている恐竜ロボットの白亜紀ゾーンと、それを作るための基になった資料を展示しているリサーチゾーンに分かれています。

3階に上がると自然発見館があります。北九州の自然環境をジオラマで復元しています。いろいろな生き物が標本で置いてあり、例えばアナグマの足元にサンショウウオがいて、アカガエルがいて、それをヘビが狙っているなど、細かい作り込みをしています。エンバイラマの恐竜ロボットのコーナーもそうですが、小さい生き物が結構入っています。一度来ただけでは多分見つけられないので、二度、三度と来て、よく見ていただけるといいと思います。外には自然学習園があります。

最近の博物館の傾向として、お客さまと標本の距離が非常に近くなっており、手を伸ばすと届くところに置いてあります。見る方からするととてもいいのですが、触られやすい、壊れやすいという問題もあるので、標本の安全性とお客さまの安全性との兼ね合いで、どこまでなら我慢できるかというところを展示しながら考えていくことになります。ところどころに、ハンズオンの扱われる標本も置いています。もちろん全部触ってもらっては困るので、きちんと分けなくてははいけません。

ぽけっとミュージアムは、小分けになった、テーマごとの展示です。常設展はなかなか展示替えができないので、展示替えがしやすいぽけっとミュージアムでトピックス的な展示をしています。

3階に上がって戻ってくると、歴史ゾーンの展示があります。こちらは、カルチャーモール、探究館、テーマ館、文化学習園、ぽけっとミュージアムという展示構成になっています。

全体として、興味のあるところをどこからでも見ていただければいいのですが、アンケート調査をすると、「分かりにくい」「どこから見ていいか分からない」「不親切である」というお叱りが必ず出ます。こちらとしてはどこから見てもいいですよというつもりなのですが、少し難しいところではあります。モデルコースを作るといいかもしれません。

いずれにしても、とてもオーソドックスに、過去の生物から現生の生き物になるように配置されています。3階の自然発見館で、北九州市周辺の自然をジオラマを作って紹介しているあたりは、地域の博物館の役割として外せないところだと思います。

3-3. リニューアルのご紹介

当博物館は、昨年3月にリニューアルオープンしました。初めて来られたお客さまにとっては、リニューアルしていろいろがいまいが今あるものが全てなので、どこが変わったというご紹介をしてもあまり意味がないのですが、うちの博物館の特徴として、リピーターの方がとても多いということがあります。普及講座なども、同じ講座なのに毎年来てくれる子がいるので、リニューアルが必要になります。市を代表する社会教育施設として、より多くの市民に愛され、社会に貢献するために進化し続ける、変わり続ける博物館を目指しています。

今回のリニューアルについては、2008年から検討を始めました。2009年にワーキンググループをつくり、2010年に中間取りまとめ、2011年に展示施設や設備調査の進化計画の報告書をまとめて、2012年3月に、いのちのたび博物館改修に当たっての設計図まで作りました。そして、平成24年12月から休館して、4カ月かけてリニューアル工事をしています。

予算的には、自前で費用を出すのは難しいということで、都市再生整備計画の補助金（旧まちづくり交付金）を申請し、認めていただきました。最初のワーキンググループで学芸員や事務職員から出た要望を積み上げると10億円規模になりましたが、最終的に3億円まで抑えて、リニューアル工事を実施してもらいました。補助金を頂いているので、市の負担は1800万円ほどで済んでいます。

リニューアルのポイントは、スーとして知られるティラノサウルス・レックスの標本を新しく入れたことです。史上最大の翼竜ケツアルコアトルス、最新の学説に沿った羽毛恐竜も展示しています。ミクロラプトル、ディロングも、新規の標本で入っています。大きな映像を新設し、突風や光の演出なども強化しています。

歴史系の方では三大祭りの山車を1カ所に集め、近・現代史のスペースを増築しています。照明のLED化もできるだけ進めています。建物自体には手を入れられないという制限があったのですが、オープンギャラリーを少しだけ拡張して、スペースを広げています。

また、これも最近の傾向かと思いますが、こどもミュージアムを新設しています。元は情報館で本を置いていたスペースなのですが、そこに完成しました。

ただ、全部が全部成功したというわけではなく、ちょっとした失敗もあります。例えば、粘土を貼った土器に縄文模様を付けてもらう体験学習では、当初、下に石臼を置いていましたが、粘土をちぎって石臼の中に入れてしまうので、1週間で石臼を引っ込めざるを得ませんでした。ですから、ハンズオンの展示をする際には、必ず担当の方を置かなくてはなりません。昨日のカナダの博物館の紹介でミュージアムエドゥケーターが必ず付いていることが報告されました。学芸員がやればよいという声が出てきますが、学芸員は他にも仕事がありますし、教育のプロではありません。ミュージアムエドゥケーターと学芸員、キュレーターは職業として分ける必要があります。

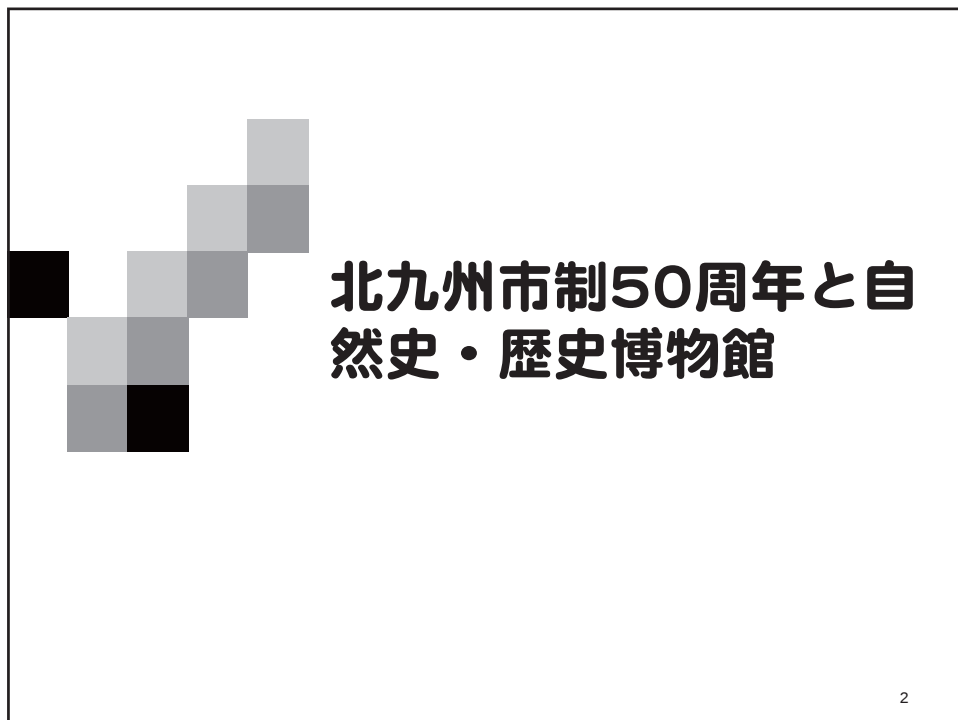
博物館の入館者数は、リニューアル前でも、年間30万～38万人でした。ですから、人数面から見るとリニューアルの必要はなかったのかもしれませんが、新しいものを入れて変わり続けないと、なかなか支持されません。市制50周年、博物館開設10周年という節目で、大規模な改修が認めてもらいやすいタイミングだったこともあったと思います。リニューアル後は、月ごとに比べても、入館者数が前年度の200～150%となり、今年度は1月末段階で55万人というたくさんのお客さまに来ていただいています。

もちろん、できなかったこともたくさんあります。特に、収蔵庫がいっぱいになっていることは頭の痛い問題です。リニューアルは、変わったことをお客さまからも見てもらわないと理解してもらえないので、どうしても収蔵庫なりバックヤードの充実は次の課題として残さざるを得なかったのです。

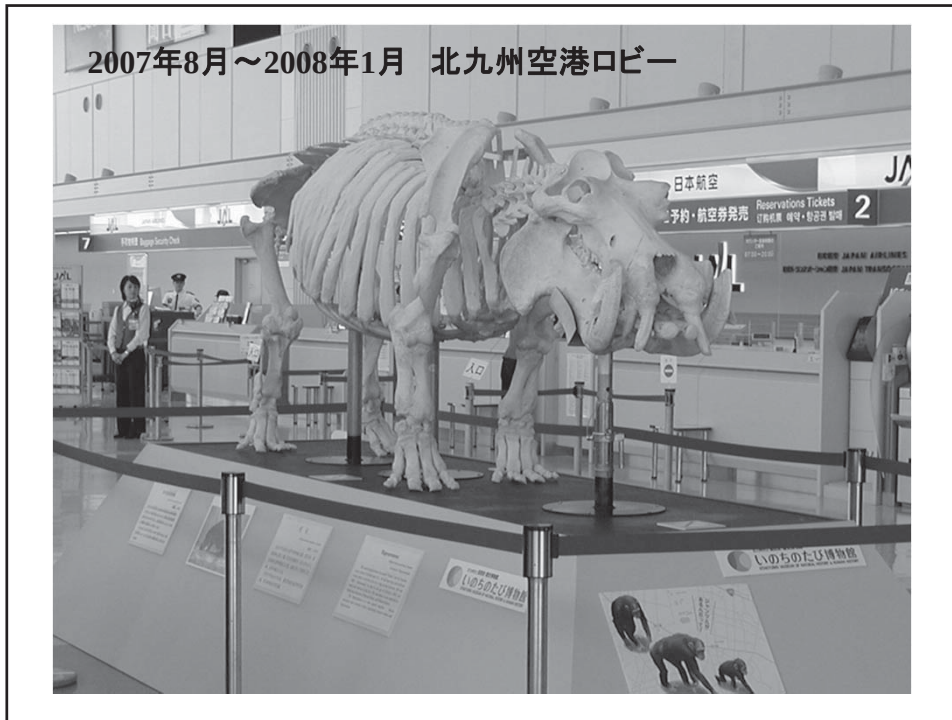
そうはいつても、友の会の会員、市民の方、国立科学博物館をはじめとする他の博物館の方、民間企業、市の事務部門、展示業者等、さまざまな方にご協力いただいて、お互いにディスカッションしながら、できる範囲でいいものを作れたのではないかと思います。いろいろな方のご協力で今の博物館ができたことに、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。



1



2



3

北九州市の誕生 昭和38年（1963年）2月10日		
	人口	
	1963年10月	2014年2月
北九州市	1,032,648	967,134
門司市（門司区）	156,195	101,360
小倉市（小倉北区、小倉南区）	313,086	397,134
若松市（若松区）	105,901	83,194
八幡市（八幡東区、八幡西区）	349,311	326,508
戸畑市（戸畑区）	108,155	58,938
* 昭和54年（1979年） 1,068,415人		

4

4

1972年～1979年にかけての文化施設建設に関する答申等

答申・報告	日付	委員会名称	候補地
北九州市立美術館建設について(答申)	昭和47年 (1972年) 2月22日	北九州市立新美術館建設準備委員会	高見丘陵地帯
北九州市立中央図書館建設について(答申)	昭和47年 (1972年) 12月26日	北九州市立中央図書館建設準備委員会	小倉図書館用地
歴史博物館開設に関する構想について(答申)	昭和48年 (1973年) 12月21日	歴史博物館開設準備委員会	中央図書館と併設
北九州市立自然史博物館の建設について(答申)	昭和52年 (1977年) 12月	北九州市立自然史博物館建設調査委員会	自然度の高い地域 公共輸送機関
考古館及び埋蔵文化財センター(仮称)計画・検討について(報告)	昭和54年 (1979年) 12月	考古館及び埋蔵文化財センター(仮称)計画・検討委員会	歴史博物館との連絡

5

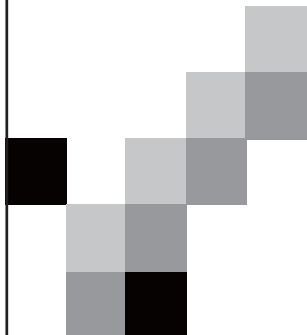
5

4 市民文化	776
1 北九州市立美術館建設について(答申)	776
2 北九州市立中央図書館建設について(答申)	779
3 歴史博物館開設に関する構想について(答申)	784
4 北九州市立自然史博物館の建設について(答申)	788
5 考古館及び埋蔵文化財センター(仮称)計画・検討について(報告)	800

**美術館 3pp., 中央図書館 5pp., 歴史 4pp.,
自然史 12pp., 考古及び埋蔵 4pp.**

6

6



北九州市立自然史・歴史博物館の略歴、概要

(特に自然史系について)

7

7

北九州市立自然史博物館

昭和56年（1981年）5月2日～平成14年（2002年）11月2日

- 北九州市立自然史博物館開設準備室
昭和53年（1978年）4月1日～昭和56年（1981年）5月1日



8

8



9

9

平成4年（1992年）の入館者数、職員数

- 入館者数 41,020人
(常設展 17,353人、特別展 23,667人)
- 職員 15名
(館長、副館長、業務課長、業務係長、業務係員、
嘱託職員、学芸主幹、学芸主査2、学芸員3、
嘱託学芸員、顧問2)

10

10



骨の処理

11

11



**北九州市立自然史・歴史博物館
(いのちのたび博物館)
開館 2002年11月3日**

(2001年 北九州博覧祭2001)

12

12

昭和50年(1975年)8月

歴史博物館開館

昭和56年(1981年)5月

自然史博物館開館(仮施設)

昭和58年(1983年)8月

考古博物館開館

(歴史博物館の分館)

**→ 平成14年(2002年)11月3日
北九州市立自然史・歴史博物館
(愛称:いのちのたび博物館)**

13

13

理念と方向性

<理 念>

自然と人間の関わりを考える共生博物館

- 1 博物館の展示に於いて示していく
- 2 教育・普及事業に於いて啓発を行う
- 3 資料収集、保存及び研究を進めていく

14

14

<方向性>

知的アクセス権を保障する博物館——知的好奇心への対応

- 1 ミュージアム・ネット化構想を進める**
- 2 常に開館している博物館**
「24時間ミュージアム」を推進する
- 3 知的な疑問や関心に責任を持って応える**

15

15

<方向性>

セカンドスクールとしての博物館——将来への知的投資

- 1 学校等に対して誘致事業を推進する**
- 2 学校教育の支援事業を強化、拡大する**
- 3 家庭教育の支援事業を充実する**

16

16

＜方向性＞

研究の成果を教育・普及に生かす博物館

——社会への知的還元

- 1 知識と経験を生かし、質の高い展示と教育・普及事業を行う
- 2 知の集積施設として外部の委員・講師や他組織の指導・助言を行う
- 3 地域の特性を活かした研究を行い、広く情報を発信する

17

17

北九州市立自然史・歴史博物館の学芸員担当分野

自然史課地学系	自然史課生物系	歴史課	MT
地質・地層	植物	考古(古墳)	中学校
岩石・鉱物	甲殻類・貝類	考古(弥生)	中学校
古脊椎動物	昆虫	歴史(中世)	小学校
古無脊椎動物	魚類	歴史(近世)	幼児教育
	両生類・爬虫類	歴史(現代史)	
	鳥類	民俗	
	哺乳類	古美術工芸	

18

18

- **自由動線** どこから見ても良い

- わかりにくい、との声も

- **時代毎の展示**

- 過去の生物から現在の生物へ

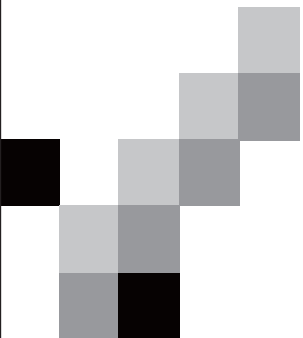
- **北九州周辺の自然の紹介**

- **トピックスの展示**

一ぽけっとミュージアム

19

19



10周年リニューアルの 概要

20

20

市を代表する社会教育施設として、
より多くの市民に愛され、社会に貢献するため、
進化し続ける博物館を目指す

- 平成20（2008）年度 4年後の開館10周年
に向けて、「今後の博物館のあり方」検討開始
- 平成21（2009）年度 ワーキング・グループ
を設置
- 平成22（2010）年3月 「いのちのたび博物
館「進化構想」」

21

21

市を代表する社会教育施設として、
より多くの市民に愛され、社会に貢献するため、
進化し続ける博物館を目指す

- 平成23（2011）年2月 「いのちのたび博物館「進
化計画」（展示・施設・設備調査）報告書」
- 平成24（2012）年3月 「いのちのたび博物館展示
改修製作業務委託 展示改修設計図」
 - 平成24（2012）年度予算編成 都市再生整備計画補助金（旧
まちづくり交付金）助成申請
- 平成24年（2012）12月3日から平成25年3月22日
まで休館 工事実施

22

22

主なりリニューアル ～あっ、変わってる！～

- 世界で最も有名な恐竜「スーとして知られるティラノサウルス・レックス」が常設展示に！
- アースモールに史上最大の翼竜「ケツアルコアトルス」をはじめとする標本を新規展示
- 巨大な映像演出
- エンバイラマ館に最新学説に沿った羽毛恐竜を追加、突風などの体感演出
- 海の生きものの映像・照明演出

23

23

主なりリニューアル ～あっ、変わってる！～

- 北九州の三大夏祭りの山車・山笠展示
- 近現代史の展示スペース拡張
- 東アジア交流コーナー新設（大連、仁川）
- 館内の展示演出照明をLED化
- オープンギャラリーを拡張
- こどもミュージアムの新設

24

24

北九州市立自然史・歴史博物館 入場者数状況

年度毎			リニューアル前後比較			
年度	入館者数	備考	月	25年度	24年度	前年度比(%)
14	162,527	(11/3開館)	4	50,381	22,768	221.3
15	321,425		5	69,760	33,648	207.3
16	300,063		6	33,160	15,434	214.9
17	483,495	(恐竜展2005)	7	60,369	38,304	157.6
18	362,291		8	144,794	97,629	148.3
19	379,447		9	42,102	44,782	94.0
20	322,726		10	50,958	40,408	126.1
21	343,390		11	38,632	50,574	76.4
22	375,590		12	24,143	2,054	
23	375,654		1	41,865	0	
24	369,711	12/3~3/22 休館	2		0	
25	556,164	(1月末現在)	3		24,110	
			合計	556,164	369,711	150.4

25

25